國學院大學学術情報リポジトリ

連体修飾語を必須とする「さま」「心地」「けはひ」などと、その述語となる自動詞「す」とについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘, Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000190

連体修飾語を必須とする「さま」「心地」「けはひ」などと、その述語となる自動詞「す」とについて

中村幸弘

第一章　「見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、」の「の」と「し（＝す）」と

実は、右の小見出しを、小稿の題目にしようかと、長く思いつづけてきていた。いまでも、そう思ってもいる。その小見出しは、『源氏物語』をある程度読んでいたら、ああ、あの「の」と「し（＝す）」かと、誰しもが直ちに反応するであろうと思えるからである。とにかく、『源氏物語』にほぼ限られる表現である。そこで、小稿の用例資料は、特にことわらないかぎり、新編日本古典文学全集『源氏物語』に拠ることとする。

○いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず。（①桐壺39）

若宮（光源氏）の神才と美貌とが内裏を圧倒するさまの描写である。この若宮を見ると、ついほほえまないではいられないお美しさだ、というのである。

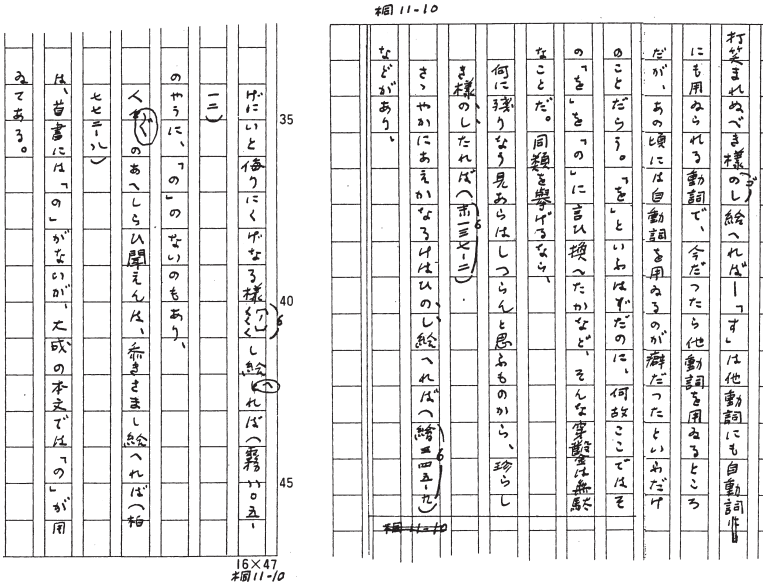
その「の」について、使用テキストの現代語訳は、そこを回避して訳出しているが、大方は、「を」と訳す「の」としている。[注①] そのように、その「の」を「を」と訳すことになると、それに続く「し（＝す）」は、わざわざ改めて確認するまでもな

く、他動詞と感じとるのが一般であろう。その「の」について、『日本国語大辞典第二版』は、■【格助】の五として取り立てている。格助詞「の」の最終ブランチである。ただその語釈欄は、あまりにもアバウトで、「他の格助詞の用法に通ずるといわれるもの。」とあるだけである。七用例挙げられている用例のなかに、その「見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば」も含まれている。他の六例のなかに共通性あるものを見出だそうと努めたが、見出だせないのである。語誌⑾・⑿を見よとの指示があるが、その⑾が該当すると判断された。その語誌⑾を、以下に引くこととする。

⑾一般に、これらは「を」に通う「の」、「に」「と」に通う「の」と称せられるが、「を」「に」「と」などの助詞によらず、敢えて「の」助詞を用いたところに、真の表現意図があると見るべきものが多い。

そのように、「を」に通いはするが、「を」ではないのである。中田祝夫編監修『古語大辞典』（小学館・昭和五十八年）の「の」の担当者は、当時の国語助詞の権威此島正年だが、その語誌でも、この用法について触れることはなかった。参考文献も、八文献が挙げられていたが、この用法に関する論考に出会えることはなかった。したがって、その他の、殊に学習用古語辞典などに、その理解を深めてくれる記事を期待することはできないであろうと思ったが、その学習古語辞典の代表ともいえる松村明他編『旺文社古語辞典第十版』（旺文社・二〇〇八年）の■【格助】のブランチ⑤「連用修飾語をつくる。」の㋑に、類書に見ない注記が施されていたのである。「サ変動詞にかかって格助詞「を」の意味に解される働きをする。」として、小見出しに掲げた、その用例を引いていたのである。

その「サ変動詞にかかって」の「サ変動詞」は、「動詞「す」」といったほうが、いっそう適切であろうと思ったが、とにかく、「の」だけでなく文意を読み解こうとする姿勢を、ある時期、学ばせていただいていた[注2]ことが思い出されてきたのであった。かつて、その『旺文社古語辞典』の編者の一人でもあった先師・今泉忠義の、没後の刊行物『源氏物語　語法篇』のなかに小稿・本章の小見出しと重なる「打笑まれぬべき様のし給へれば」立項の解説を読んでいた日が確かにあったからである。直筆原稿のままの同書の該当部分を以下に引くこととする。



それまで、「の」だけの問題とされていた、その「見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、」の読解が、「し（＝す）」との関連で理解していけるようになった、ということである。いま、この解説において、その「し（＝す）」を自動詞とされたご判断で、理解が大いに深まった。そこで、その「の」は「を」を言い換えたものではない、と申し上げさせていただいて、いささか穿鑿することをお許しいただきたくお願いもうしあげる次第である。

第二章　連体修飾語を必須とする「さま」「心地」「けはひ」などと、その述語となる自動詞「す」との文構造—支持したくなる宿木の巻・別本系の本文—

先師が、そこにお挙げになる類例から、以下の三点を感じとることができた。なお、その一部については、補訂を加えさせていただいた。

①「珍しき様のしたれば」（末一三七—二）／「さゝやかにあえかなるけはひのし給へれば」（絵三四五—九）／げにいと侮りにくげなる様〔ノ〕し給へれば」（霧八〇五—一二）／

「忝きさま〔ノ〕し給へれば」（柏七七二—八）などの、その〜部分（連体修飾語）が必須であることを感じとることができた。

②「さゝやかにあえかなるけはひのし給へれば」（絵三四五—九）から、①の連体修飾語の被修飾語となる名詞は、「さま」のほかに「けはひ」もあることを知った。そして、それら名詞は、漠然と感じとれる状態を意味する形式名詞性の名詞であろうかと推測された。

③げにいと侮りにくげなる様〔ノ〕し給へれば」（霧八〇五—一二）／「忝きさま〔ノ〕し給へれば」（柏七七二—八）から、その「の」は、表出される場合も、されない場合もあることを知った。また異本による異文の存在することも知った。

もちろん、そのほかに、その動詞「す」は連用形「し」の場合ばかりであり、その「し」の下には、存続の助動詞—「給ふ」を用いた場合は「り」、用いない場合は「たり」—の已然形に接続助詞「ば」が付いて、順接確定条件となっていることから、そういう傾向にあることを感じとることができた。

実は、小稿の結論は、もはや、以上をもって、ほぼ尽くされたといっていいのである。ただ、先師の、その「打笑まれぬべき様のし給へれば」の解説が、直ちに、そのように読み解けたわけではなかった。そこにいう、自動詞という決定的なご判断が、どのような背景あって示された結論なのか、そこを考えなければならないと思った。わざわざ自動詞であると述べるのは、大方がそこを他動詞としているとお思いになったからであろうと思った。ただ一般には、わざわざ、その「す」が他動詞だということもないであろう。すると、それは、その「の」を「を」と訳出する大方の理解に対する考え方を示すものかと思えてきた。その「の」は、「を」ではない、といおうとするものであろうと見えてきたのである。

そこまで見えてきたところで、今泉忠義・鎌田広夫共編『国語学演習用　源氏物語　桐壺（附源氏物語ところどころ）』[注③]という、角書きにいうとおりの国語学演習用教材の存在が思い出されてきた。その教材は、偶数ページに対応する各奇数ページに演習の手掛かりが列挙されていて、「見てはうち笑まれぬべき様のしたれば、」（五六ページ）を受けて、その対応する奇数ページ（五七ページ）には、「▽うち笑まれぬべき様のし給へれば—珍しき様のしたれば（末摘花）常に目なれぬ様のし給へるを（若菜上）」とあったのである。また、巻末には、「源氏物語「桐壺」用語索引」が付いていて、その助詞の欄には「の」も当然立項されていて、その「の」には、〈○主格の「の」・○

デ・〇ト・〇トスル・〇ヲ〉の五ブランチがあった。そのカタカナ書きは、訳語といってよく、その〈〇ヲ〉には、「うち笑まれぬべき様のし給へれば五六2□」とあった。そのように「ヲ」と訳させるということは、その「し（＝す）」は、他動詞だということでもあったのである。先師の『源氏物語　語法篇』の、そのように書き始められる前段階を、そのように読みとらせていただいた。

ただ、その『源氏物語　語法篇』よりも先に刊行されていた『源氏物語現代語訳一』[注④]では、どう訳出されていたかというと、そこは、「一目見ただけでもう、自然ににっこりとしないではゐられさうもないくらゐかはいいお顔をしていらっしゃるので、」とあって、それは、格助詞「を」であり、他動詞「し（＝す）」だったのである。極端なことをいうと、先師は、その現代語訳ご執筆の段階では、なお、その「の」は「ヲ」であり、「し（＝す）」は、他動詞と見ていらっしゃった、ということになるのである。『国語学演習用　源氏物語　桐壺（附源氏物語ところどころ）』と同じお考えでいらっしゃった、ということでもある。それが、いつ、その『源氏物語　語法篇』にお書きのようにお考えになったのか、契機となる何かがおありだったのであろうか、など、ご存じの方々からのお教えがいただきたいと切望する次第である。

さて、ここで、「さま」「けはひ」と「し（＝す）」＋存続の表現とを手掛かりに、それらによって構成されている表現を検出する作業を開始することになった。当然、当初から気づいていたことではあるが、連体修飾語を冠していない用例に出会えることはなかった。次第に、その「の」を表出しているものは、むしろ限られるが、とにかく、「の」のあるもの・ないものが用例数としても、一定数を数えるところに到達した。「の」の代わりに、そこに係助詞の類を用いている用例にも出会えた。そして、「けはひ」だけでなく、「心地」もまた、そのような文脈に位置する用例を、むしろ多く見せることに気づかされた。「けしき」「すがた」なども、いつか、メモされていた。それらにも、連体修飾語が必ず冠せられていた。

「さま」と「し」とに注目するあまり、「さま」と「し」とが連接する次の表現については、「さまし（＝さます）」などという動詞ではなく、そこは、誤文としなければならないかに感じとれてしまった。もちろん、それは、同時併行的に、『対校源氏物語新釈』[注⑤]本文との照合を行いながらの用例検出作業という作業形態をとっていたことにもよるのであろうが、とにかく、現在一般には認められない、その本文を支持したくなってし

まったのである。

○女君は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、いかで気色（けしき）に出ださじと念じ返しつつ、つれなくさましたまふことなれば、ことに聞きもとどめぬさまに、おほどかにもてなしておはする気色いとあはれなり。（⑤宿木402）

『対訳源氏物語新釈』の、その部分は、「つれなきさまし給ふことなれば」（五・宿木二四三）となっている。その本文に従えば、ここも、「連体修飾語＋さま＋し（給ふことなれば）」となって、「さま」を用いた描写表現となってくるのである。早速、『源氏物語大成三』[注6]の該当部分を確認した。湖月抄本を底本にした『対校源氏物語新釈』本文と同じ「つれなき」とある本文は、【別本】系の「阿」とある阿里莫本といわれる桃園文庫蔵の本文と、「桃」とあって特定の名称をもたない桃園文庫蔵の本文との、二本に限られたのである。そうではあっても、ここは、「つれなき」で読みたいと思ったのである。

小稿は、『日本国語大辞典　第二版』「の」の語誌⑾その他が広く問題提起している問題について、先師のお説を頂戴して、既に一定の姿勢を表明しえたものと思っている。次章からは、「さま」と「し（＝す）」、「心地」と「し（＝す）」、「けはひ」と「し（＝す）」の要領で、その実態を報告していきたいと思う。

第三章　「連体修飾語＋さま」と動詞「す」とを用いて構成された表現

「連体修飾語＋さま」と動詞「す」を用いて構成された表現の大方は、直ちに次のように三分類することができる。⑴その「さま」が格助詞「の」を接続させている用例群（A用例群）、⑵その「の」に代わって、係助詞など、他の助詞を接続させている用例群（B用例群）、⑶「さま」に接続する助詞が存在しない、無助詞の用例群（C用例群）の三群である。以上の三用例群が共存することについては、「さま」だけでなく、「心地」や「けはひ」の場合にも、その傾向が認められる。また、それらA・B・C用例群とともに、連体修飾語を冠した「さま」「心地」「けはひ」などは、いずれも一般にいう主語[注7]と感じることができ、それを受ける動詞「す」については、自動詞と判断することができる。

したがって、そのように連体修飾語を冠した「さま」「心地」「けはひ」などに、格助詞「を」が接続している用例を見ることはまったくない。この点については、強く認識しておきた

い。一瞬、C用例群の各用例について、格助詞「を」が表出されない、ヲ格の非表出用例かと受けとめられてしまうことがあるだけに、警戒しておきたい。さらに、また、以上の傾向は、「さま」「心地」「けはひ」以外にも、それらに類する名詞の、何単語かについていえるところだが、その詳細は、「さま」「心地」「けはひ」について観察した後に一括して取り上げることとする。

なお、以上で、大方の傾向について、あらかじめ総括して述べたので、以下の各章では、「心地」「けはひ」その他、それぞれの実態を紹介するにとどめることをお断りしておく。

(1)「連体修飾語＋さま」が格助詞「の」を接続させて動詞「す」にかかっていく用例（A用例）

○第一章に既出。（①桐壺39）

○何に残りなう見あらはしつらむと思ふものから、めづらしきさまの、□たれば、さすがに見やられたまふ。（①末摘花293）

○母屋の廂に御座よそひて入れたてまつる。おしなべたるやうに人々のあへしらひきこえむは、かたじけなきさまの、□たれば、御息所ぞ対面したまへる。（④柏木328）

○御前に近き若木の梅心もとなくつぼみて、鶯の初声もいとおほどかなるに、いとすかせたてまつらまほしきさまの、□たまへれば、人々はかなきことを言ふに、言少なに心にくきほどなるをねたがりて、宰相の君と聞こゆる上臈の詠みかけたまふ。（⑤竹河68）

○まことに、いみじき過ちありとも、ひたぶるにはえぞ疎みはつまじく、らうたげに心苦しきさまの、□たまへれば、えも恨みはてたまはず、のたまひさしつつ、かつはこしらへきこえたまふ。（⑤宿木436）

○かれは、限りなくあてに気高きものかな、なつかしうなよよかに、かたはなるまで、なよなよとたわみたるさまの、□たまへりしにこそ、これは、…、など、このかみ心に思ひあつかはれたまふ。（⑥東屋73）

(2)「連体修飾語＋さま」が係助詞を接続させて動詞「す」にかかっていく用例（B用例）

○うちとけて向かひゐたる人は、え疎みはつまじきさまも、□たりしかな、…と思し出づるに憎からず、なほ懲りずまに、またもあだ名立ちぬべき御心のすさびなめり。（①夕顔191）

○正身も、あなをかしげとふと見えて、山吹にもてはやしたまへる御容貌など、いとはなやかに、ここぞ曇れると見ゆるところなく、隈なくにほひきらきらしく、見まほしきさまぞ、□たまへる。（③初音148）

○…、このごろこそねびまさりたまへる御盛りなめれ、さるさまのすき事したまふとも、人のもどくべきさまも、したまはず、鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかにも清げに若う盛りにほひを散らしたまへり、…、とわが御子ながらも思す。（④夕霧471）

○姫君は、心ばせ静かによしある方にて、見る目もてなしも、気高く心にくきさまぞしたまへる、いたはしくやむごとなき筋はまさりて、いづれをも、さまざまに思ひかしづききこえたまへど、かなはぬこと多く、…。（⑤橋姫120）

○すずろに見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひきつくろはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさまぞしたまへる。（⑥東屋51）

○めづらしくをかしと見たまひし人よりも、また、これはなほありがたきさまはしたまへりかしと見たまふものから、いとよく似たるを思ひ出でたまふも胸ふたがれば、いたくもの思したるさまにて、御張に入りて大殿籠る。（⑥浮舟137）

○尼君、「…。右の大殿と」とのたまへば、紀伊守「それは、容貌もいとうるはしうきよらに、宿徳にて、際ことなるさまぞしたまへる。…」など、…。（⑥手習359）

B用例は、ヲ格の非表出とも感じられようが、その「し（＝す）」を自動詞〈感じられる〉と思って読み改めると、ガ格の非表出というように感じとることができよう。

(3)「連体修飾格＋さま」が無助詞のまま、動詞「す」にかかっていく用例（C用例）

○こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさまして、あて人と見えたり。（①帚木106）

○言ひ立つればわろきによれる容貌を、いといたうもてつけて、このまされる人よりは心あらむと目とどめつべきさまたり。（①空蟬121）

○…、僧都「…、かの祖母に語らひはべりて聞こえさせむ」とすくよかに言ひて、ものごはきさましたまへれば、若き御心に恥づかしくて、えよくも聞こえたまはず。（①若紫214）

C用例について、「連体修飾語＋さま」に接続する助詞が存在しないとか、無助詞といってきたりしているが、一旦、そう受けとめたうえで、ガ格が表出されていない用例で、格助詞「の」が接続していないものというように受けとめていきたい用例群である。殊に、このC用例については、その非表出の主格の存在を、あの時枝誠記がいった陳述機能を指していうものではないが、零記号[注8]のようなものを借りて説明したいと思っている。連体修飾語＋さま■して などとでもして、その格関係

を感じとりたいと思っている。

さて、このC用例は、あまりにも、その該当用例が多い。以下、その該当語句部分だけを列挙することとする。

○なまめきたるさまして、（①帚木106）／○いとらうたげなるさまして、（①夕顔179）／○絵に描きても見まうきさましたり。（①末摘花306）／○いとよしあるさまして、（①紅葉賀318）／○もの遠きさましておはするに、（①紅葉賀345）／心恥づかしきさまして参りたまへり。（②葵54）／○いとよしよししう気高きさまして、（②明石264）／○絵に描きたらむさまして（②澪標312）／○もの思ひなげなるさまして、（②蓬生338）／○ものきよげによしあるさまして、（②蓬生338）／○いと児めかししめやかにうつくしきさましたまへり。（③少女54）／○いとけざやかなるさましたまへるを、（③初音148）／○いとまめやかにことごとしきさましたる人の、（③胡蝶177）／○我にもあらぬさまして、（③胡蝶189）／○いときよけにものものしく、はなやかなるさまして、（③常夏246）／○けざけざとものきよげなるさましてゐたまへり。（③野分278）／いとなごやかなるさまして（③野分279）／○いまめかしくいとなまめきたるさまして、（③藤袴336）／○いとあざやかに男々しきさまして、（③真木柱365）／○いたく酔ひ乱れたるさまして、（③真木柱382）

おおよその傾向は、もはや明らかであろう。以下、『源氏物語④』『源氏物語⑤』『源氏物語⑥』に、同趣の用例が四十八用例数えられ、都合七十一用例ということになろうか。

ここで、この「連体修飾語＋さま」の連体修飾語は、その長短もさまざまであり、殊にその部分に見られる並立関係については、十分には理解できていない事情もいくつかあって、その整理は容易ではないと感じている。それらを無視して、全体をアバウトに受けとめると、個々の「連体修飾語＋さま」＋「す」が、形容詞・形容動詞相当の一概念に感じられてくるのである。その一概念の末尾となる「す」の活用形の偏り、さらには、それに接続する助詞・助動詞が限られるのも、その形容詞・形容動詞に相当する概念を担っていることと関係していようか。つまり、そこが情態描写となっている、ということである。

以上の、これら「連体修飾語＋さま」と動詞「す」とによって構成されている表現から、大方が連用形「し」となる動詞「す」について、自動詞として受けとめることができたであろうか。「連体修飾語＋さま」と、その動詞「し（＝す）」との間に、ガ格の対象格性[注⑨]が見えてきたであろうか。

さて、そのように、A用例群・B用例群・C用例群とも、その「連体修飾語＋さま」と動詞「す」との間に、ガ格の対象格性が見えてきた、ということから考えて、(1)において、そのA群の説明に、「格助詞「の」を接続させて」は、「格助詞「の」を表出して」でなければならなかった、ということになろう。以下の各章においては、そのように説明を補っていくこととする。

第四章　「連体修飾語＋心地」と動詞「す」とを用いて構成された表現

「心地」は、上代には存在しない単語である。それが『源氏物語』などに大量に採用されており、殊に、この「連体修飾語＋心地」と動詞「す」とを用いて構成された表現は、「連体修飾語＋さま」と動詞「す」とを用いて構成された表現の七倍ほどの用例数を見るのである。[注10]そこで、その「連体修飾語＋心地」と動詞「す」とを用いて構成された表現についても、その各用例を、A用例群・B用例群・C用例群の順に観察していくこととする。

(1)「連体修飾語＋心地」が格助詞「の」を接続させて（＝表出して）動詞「す」にかかっていく用例（A用例）

○朱雀院「いま少しものをも思ひ知りたまふほどまで見過ぐさむとこそは、年ごろ念じつるを、深き本意も遂げずなりぬべき心地の、する に思ひもよほされてなむ。…」と、よろづに思しわづらひたり。（④若菜上35）

○宮おはしまさねば心やすくて、中将の君「あやしく心幼げなる人を参らせおきて、うしろやすくは頼みきこえさせながら、鼬のはべらむやうなる心地の、し はべれば、よからぬものどもに、憎み恨みられはべる」と聞こゆ。（⑥東屋75）

○…、皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風ははげしう、川波も荒う聞こえしを、…、をこがましうて人に見つけられむよりは鬼も何も食ひて失ひてよと言ひつつくづくとゐたりしを、いときよげなる男の寄り来て、いざたまへ、おのがもとへ、と言ひて、抱く心地の、せ しを、宮と聞こえし人のしたまふとおぼえしほどより心地まどひにけるなめり、知らぬ所に据ゑおきて、この男は消え失せぬと見しを、…。（⑥東屋296）

以上の三例が、A用例の全用例である。それにしても、「連体修飾語＋心地」と動詞「す」とを用いて構成された全用例に比して、何とも低い用例数である。例によって、『対校源氏物

語新釈』と併せて検出に努めていたところから、実は、二か所に、その異同を見ることになった。

○…、柏木「…。惜しげなき身をさまざまにひきとどめらるる祈祷、願などの力にや、さすがにかかづらふもなかなか苦しうはべれば、心もてなむ、急ぎたつ心地しはべる。…」などのたまふままに、…。（④柏木315）

右の「心地しはべる。」には注が施されていて、「「心地の」とする本も多い。」としてあった。底本に忠実であることと、一般読者に向けて、どう校訂していくことが望ましいか、悩ませられるところである。とにかく、『対校源氏物語新釈』の本文には、そこに「の」があった。

○…匂宮「いま、いととく参り来ん。…」と聞こえおきたまひて、なほかたはらいたければ、隠れの方より寝殿へ渡りたまふ、御後手を見送るに、ともかくも思はねど、ただ枕の浮きぬべき心地すれば、心憂きものは人の心なりけり、と我ながら思ひ知らる。（⑤宿木402）

○…、ただ枕の浮きぬべき心地の、すれば、…。（対校源氏物語新釈五・宿木二四三）

以上である。それにしても、全用例で五用例で、用例は限られる。ただ、そのように用例が限られるのに、その動詞「す」の活用形には、少し変化が認められるようである。

(2)「連体修飾語＋心地」が係助詞を接続させて動詞「す」にかかっていく用例（B用例）

○上も、限りなき御思ひどちにて、帝「な疎みたまひそ。あやしくよそべきこえつべき心地なんする。」なめしと思さで、らうたくしたまへ。…」など聞こえつけたまへれば、…。（①桐壺44）

○…、をかしき額つきの透影あまた見えてのぞく。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。（①夕顔135）

○もし思ひよる気色もやとて、隣に中宿をだにしたまはず。女も、いとあやしく心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、暁の道をうかがはせ、御あり処見せむと尋ぬれど、…。（①夕顔152）

係助詞だけでなく、副助詞「のみ」も、自動詞「し（＝す）」の対象語末尾に付いて、「心得ぬ心地のみ」となっていた。「心得ぬ心地のみ」〔ガ〕〈感じられる〉、というのである。

○夕映えを見かはして、女もかかるありさまを思ひの外にあやしき心地はしながら、よろづの嘆き忘れてすこしうちとけゆく気色いとらうたし。（①夕顔163）

○源氏世に知らぬ心地こそすれ有明の月のゆくへを空にまがへて（①花宴360）

以下、『源氏物語②』に延べ用例数八用例、『源氏物語③』に延べ用例数九用例、『源氏物語④』に延べ用例数十三用例、『源氏物語⑤』に延べ用例数十三用例、『源氏物語⑥』に延べ用例数十八用例が検出でき、全冊六冊のなかに、都合七十四用例が数えられた。続いて、新出する係助詞が接続する用例、副助詞と重なる係助詞が接続する用例などを挙げていくこととする。

○飽かず悲しくて、御供に参りなんと泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、御けはひとまれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。（②明石229）

○薫「朝夕の隔てもあるまじう思うたまへらるめるほどながら、そのこととなくて聞こえさせんも、なかなか馴れ馴れしき各めやとつつみはべるほどに、世の中変りにたる心地のみぞしはべるや。…」と聞こえて、…。（⑤早蕨368）

右は、その対象語「世の中変りにたる心地のみぞ」のなかに副助詞「のみ」と係助詞「ぞ」とが末尾に付いている用例である。次用例は、使用テキストではそうではないが、『対校源氏物語新釈』本文に、その類用例を見ることができた。

○…、匂宮「…。さまざまにせさすることも、あやしく験なき心地こそすれ。…」などやうなるまめごとをのたまへば、…。（⑤宿木407）

○…、匂宮「…。さまぐにせさする事・も怪しうしるしなき心地のみこそすれ。…」…。（対校源氏物語新釈五・宿木二四八）

「連体修飾語＋心地」に接続する係助詞として残る用例は、次の用例に見る「や」である。

○…、浮舟「隔てきこゆる心もはべらねど、あやしくて生き返りけるほどに、よろづのこと夢のやうにたどられて、あらぬ世に生まれたらん人はかかる心地やすらんとおぼえはべれば、今は、知るべき人世にあらんとも思ひ出でず、ひたみちにこそ睦ましく思ひきこゆれ」とのたまふさまも、…。（⑥手習310）

「かかる心地やすらん」は疑問文だが、「かかる心地や」が「すらん」の対象格となっていることに変わりはない。

以上の、「連体修飾語＋心地」のB用例が、どんな係助詞、また、副助詞と重なる係助詞を接続させているか、それぞれの用例数という視点から再整理しておこう。係助詞「も」十八用例、係助詞「ぞ」十六用例、係助詞「なむ」十五用例、副助詞

「のみ」十用例、係助詞「こそ」九用例、係助詞「は」四用例、係助詞「や」一用例、副助詞「のみ」と係助詞「ぞ」が重なるもの一用例の計七十四用例である。副助詞「のみ」と係助詞「こそ」とが重なるもの一用例は、『対校源氏物語新釈』本文から引いた用例であった。

(3)「連体修飾語＋心地」が無助詞のまま、動詞「す」にかかっていく用例（C用例）

この該当用例数はあまりにも多い。筆者の採集カードでは、四百十七用例存在することになっている。そのように大量の用例が存在するのだが、幸い、その無助詞部分が直ちにガ格と感じとれてしまうところから、本小稿としては、動詞「す」の活用形の実態を眺める程度の紹介にとどめることとする。

○…、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地し て、…。（①桐壺27）

○物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、…。（①夕顔164）

「連体修飾語＋心地して、」の類用例は多く、いずれも無助詞である。

○「…、物の足音ひしひしと踏みならしつつ背後より寄り来る心地す。（①夕顔169）

「連体修飾語＋心地す。」の類用例も多く、それらも無助詞である。

○…、すごう、うたていさとき心地する夜のさまなり。（①末摘花291）

○…、小君出でくる心地すれば出でたまひぬ。（①空蟬122）

前例は、「連体修飾語＋心地す」の「す」が連体形「する」となって、その語句全体が連体修飾語となっている。後例は、「連体修飾語＋心地す」の「す」が已然形「すれ」となって接続助詞「ば」に連なり、その語句全体が順接確定条件を構成している。

○あまた年今日あらためし色ごろもきては涙ぞふる心地する（②葵79）

○…、源氏「かく言ふわが身こそは生きとまるまじき心地すれ」とのたまふも、…。（①夕顔180）

前用例は、和歌だが、「涙ぞふる心地する」であって、「涙ふる心地ぞする」ではない。後用例は、会話文に見る用例だが、「わが身こそは生きとまるまじき心地すれ」であって、「わが身は生きとまるまじき心地こそすれ」ではない。それぞれ、その構文の相違は明らかで、本節で取り立てた「係助詞「ぞ」→連体修飾語＋心地する」「係助詞「こそ」→連体修飾語＋心

地すれ」の「連体修飾語＋心地す」には、一概念性を認めなければならないであろう。

以上が「連体修飾語＋心地」が無助詞のまま動詞「す」にかかっていく用例の、大まかな紹介である。

第五章　「連体修飾語＋けはひ」と動詞「す」とを用いて構成された表現

「けはひ」もまた、上代には存在しない単語である。『源氏物語』において、その語義をどう解していくか、殊に「気色」とどう異なるか、注目されてきている。吉沢義則『源語釈泉』[注11]は、「けはひ」と「けしき」とをほぼ同義とし、北山谿太『源氏物語のことばと語法』[注12]は、『徒然草』百四段の「けはひ」の語釈から始まって、鈴虫・浮舟・夕顔・野分・夕霧の諸用例から〈声〉と解する姿勢を示している。たまたま筆者も、中田祝夫他編『古語大辞典』（小学館・昭和五十八年）の「けはひ」の語誌を担当[注13]して、〈聴覚によってとらえられる事物の様子〉を指すとした。

さて、その「けはひ」についても、「連体修飾語＋けはひ」と動詞「す」とを用いて構成されてた表現をA用例群・B用例群・C用例群の順に観察していくこととする。

(1)　「連体修飾語＋けはひ」が格助詞「の」を接続させて（＝表出して）動詞「す」にかかっていく用例（A用例）

○人知れず、大人は恥づかしうやあらむと思しけるを、いたう夜更けて参上りたまへり、いとつつましげにおほどかにて、ささやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかしと思しけり。（②絵合373）

○宮は、何心もなく大殿籠りにけるを、男のけはひのすれば、院のおはすると思したるに、うちかしこまりたる気色見せて、床の下に抱きおろしたてまつるに、物におそはるるかとせめて見開けたまへれば、あらぬ人なりけり。（④若菜下223）

○容貌もいとなまめかしからむと、見まほしきけはひのしたるを、この人ぞ、また、例の、かの御心乱るべきつまなめると、をかしうも、ありがたき世やとも思ひゐたまへり。（⑥蜻蛉275）

「さま」「心地」のA用例群諸用例の文脈にまったく同じで、もはや、直ちに、その「の」が対象格の格助詞として読み解けてくるであろう。第一用例は、斎宮の女御の「けはひ」が、第二用例は、実は柏木の「けはひ」が、第三用例は、逢ってみたい女性の「けはひ」が、それぞれ感じとれると思う。

(2)「連体修飾格＋けはひ」が係助詞を接続させて動詞「す」にかかっていく用例（B用例）

○何心もなくうちとけてゐたりけるを、かうものおぼえぬに、いとわりなくて、近かりける曹司の内に入りて、いかで固めけるにかいと強きを、しひてもおし立ちたまはぬさまなり。されど、さのみもいかでかあらむ。人ざまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひぞしたる。（②明石258）

「けはひ」のB用例は、右の一用例だけである。明石の入道の娘である明石の君の「けはひ」が感じとれる表現である。

(3)「連体修飾語＋けはひ」が無助詞のまま、動詞「す」にかかっていく用例（C用例）

「けはひ」についても、このC用例は、その該当用例が多い。以下、該当語句周辺に限って列挙することとする。

○ただ時々うち嘆くけはひする方に寄りかかりて、（①花宴366）／○にぎははしきけはひしたまへる人の、（②賢木143）／○すこしけ近きけはひするに（③蛍201）／○宰相の君、内侍などのけはひすれば（③野分274）／○戸口に人々のけはひするに寄りて、（③野分276）／○いとすくよかに重々しく、男々しきけはひして、（④柏木337）／○ゐざり出でたまふけはひすれば、（④柏木338）／○いとあてに女しう、なまめいたるけはひしたまへり。（④夕霧480）／○みやびやかにゆゑあるけはひして、（⑤橋姫159）／○なのめならぬけはひして軽らかにものしたまへる心ばへの、（⑤椎本205）／○もの言ふけはひすれば、（⑥蜻蛉255）／○ありつる衣の音なひしるきけはひして、（⑥蜻蛉269）

さらに、いま一用例、「けはひ」が接尾語「ども」を伴っている用例が存在する。場面が見えるように、少し長めに引いておくこととする。

○軽々しうも見えず、ものきよげなるうちとけ姿に、花の雪のやうに降りかかれば、うち見上げて、しをれたる枝すこし押し折りて、御階のほどにゐたまひぬ。督の君つづきて、柏木「花乱りがはしく散るめりや。桜は避きてこそ」などのたまひつつ、宮の御前を後目に見れば、例の、ことにをさまらぬけはひどもして、色々こぼれ出でたる御簾のつまづま透影など、春の手向の幣袋にやとおぼゆ。（④若菜上140）

(4)「連体修飾語＋けはひ」が副詞を介在させて、動詞「す」にかかっていく用例（D用例）

「さま」「心地」には見られなかった用例を見ることになってしまった。「連体修飾語＋けはひ」が副詞を介在させて、動詞にかかっていく表現で、D用例と呼ぶこととした。

○内裏より参りたまへるなるべし、御前どものけはひあまたして、薫「…」と聞こえたまへば、中の君「…」とばかり答へきこえたまふ。（⑥東屋51）

○宮の君は、この西の対にぞ御方したりける。若き人々のけはひあまたして、月めであへり。（⑥蜻蛉273）

前用例は、挿入句「内裏より参りたまへるなるべし、」から推測できる前駆の者たちの「けはひ」が感じとれたのである。後用例は、西の対を局にしていて若い女房たちの「けはひ」が感じとれたのである。C用例の末尾に引いた、「をさまらぬけはひどもして、」（④若菜上140）と、どう異なることになろうか。とにかく、どちらも複数の「けはひ」を表現しようとしたものである。

以上、「けはひ」についても、連体修飾語を冠して、「さま」「心地」と共通する文脈で、それぞれの動詞「す」は、〈感じとれる〉意の自動詞として機能していることが確認された。

第六章　「さま」「心地」「けはひ」以外の名詞で連体修飾語を冠したものや、複合名詞などが、動詞「す」にかかっていく表現

小稿は、その結論ともいうべき文構造の一形式（「連体修飾語＋さま・心地・けはひ」（対象語）＋自動詞「す」文）の確認は、既に前章までのところで終了した。小稿の題目をさらに小分けした、連体修飾語を必須とする「さま」「心地」「けはひ」と、その述語となる自動詞「す」とについては、既に、そのすべての解説を述べ終えた。論じ尽くした、といえるほどの論述ではないが、とにかく書き終えて、本章は、同じ文構造と認めてよいと思える諸用例を拾い集めて紹介する段階に到達したのである。そこで、あらかじめ紹介すると、連体修飾語を冠した「気色」「容貌」「顔」「色」「姿」、そして、複合名詞「顔変り」「心しばり」が、動詞「す」にかかっていく表現の観察に入ることになった、ということである。

○惟光「…、文書くとてゐてはべりし人の顔こそいとよくはべりしか。もの思へるけしきして、ある人々も忍びてうち泣

くさまなどなむ、しるく見えはべる」と聞こゆ。（①夕顔193）

○姫君は、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき景色して、ひたみちに若びたまへり。（④若菜上63）

○さきざきも聞きし声なれば、声づくり気色とりて御消息聞こゆ。若やかなるけしきどもして、おぼめくなるべし。（②花散里155）

「けはひ」と微妙な関係にある「気色」の用例で、第三用例は、接尾語「ども」を伴っているだけでなく、河内本には「けはひ」とする異文を見る用例である。

○こまかににほへるところはなくて、父宮に似たてまつりて、なまめいたる容貌したまへるを、もてやつしたまへれば、…。（③真木柱366）

○二十七八のほどの、いと盛りににほひ、はなやかなる容貌したまへり。（④竹河112）

○十七八のほどにて、うつくしうにほひ多かる容貌したまへり。（⑤紅梅41）

○雲居雁「…、例の物の怪の入り来たるなめり」など、いと若くをかしき顔してかこちたまへば、…。（④横笛361）

○…、宿直人に〔和歌ヲ〕持たせたまへり。いと寒げにいらぎたる顔して、持てまゐる。（⑤橋姫150）

○…、仲人「左近少将殿の御消息にてなむさぶらふ」と言はせたれば、会ひたり。語らひがたげなる顔して、近う寄りゐて、…。（⑥東屋26）

○…、今ぞ参りてものなど聞こゆる中に、きよげだちて、なでふことなき人のすさまじき顔したる、直衣着て太刀佩きたるあり。（⑥東屋45）

前三用例は「容貌」、後四用例は「顔」である。その、「顔」の最終用例は、「なでふことなき人の」と「すさまじき顔したる」とが、同格の関係にある表現である。

○柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さしかはしたるを、…。（④柏木337）

人物描写以外は珍しく、右用例は、樹木の描写である。

○何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに小さき人のものげなき姿ぞしたる、顔などは、さし向かひたらむ人などにもわざと見ゆまじうもてなしたり。（①空蟬120）

「ものげなき姿」が係助詞「ぞ」を伴って「したる」にかかっている表現である。使用テキストは〈頭つきもほっそりと小柄な人が、目だたぬ姿でいる。その顔などは、〉と訳出しているが、〈頭つきもほっそりとして小柄な人の目だたない姿

が感じとれた、その顔などは〉と読みとらせていただいた。

○音をのみ泣きて日数経にければ顔変りのしたるも見苦しくはあらで、いよいよものきよげになまめいたるを、…。（⑤総角338）

○乳母、「あやしく心ばしりのするかな。…」と言はするを、…。（⑥浮舟196）

右二用例は、連体修飾語はないが、名詞が複合名詞で、連体修飾語が冠せられているのと同じように見てよい名詞ということになるのであろうか。ともに、対象格の格助詞「の」が表出されている。その動詞「す」は、確かな自動詞で、〈感じとれる〉というように確かに訳出できた。

第七章　待たれる動詞「す」の自動詞・他動詞交渉論

ここにいう「交渉」は、山田孝雄『日本文法論』にいう「「あり」と「す」との交渉」[注14]の「交渉」に倣おうとするものである。ある用法の「あり」は「す」とも表現され、「す」は「あり」とも表現され、時代によっては、どちらかに移ったり、偏ったりする現象と解している。小稿が取り上げた動詞「す」は、自動詞とも他動詞とも判断しがたい用例を見せ、時代によっては、どちらかに移ったり、偏ったりするもののように見えたからである。より適正な術語はしばらく待つとして、待たれるのは、その交渉の実態の整理である。

『源氏物語』の、そのころは、「見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、」か「見てはうち笑まれぬべきさましたまへれば、」かであったが、現代人には、「見てはうち笑まれぬべきさましたまへれば、」はともかく、大方は、「見てはうち笑まれぬべきさまをしたまへれば、」でなければ、もはや納得できなくなってしまっていたのである。「嫌な顔をしてみせる。」「妖しいそぶりをしてみせた。」などは、その動詞「する」が全面的に他動詞化した結果の表現だったのである。

注

① 筆者自身がこの「の」を意識したのは、湯沢幸吉郎『文語文法詳説』（右文書院・昭和三十四年）の格助詞「の」の〈格助詞の「を」の意味に解せられる「の」〉（同書四六五ページ）であったかと思っている。特別に、その「の」についての解説はなかったが、その「（省略）見てはうち笑まれぬべき様の「ヲ」し給へれば、（省略）」の、「様」字と「し」字とに付けられた○印が、その後の筆者には、読解の大きなヒントとなっている。なお、小田勝『古典文法詳説』（おうふう・二〇一〇年）は、目的語・格助詞「を」の項で、〈「を」に通う「の」〉（同書三

○○ページ）として、用例⑳から㉕までの六用例を引いているが、⑳以外の用例は、小稿が対象としようとしている用例ではない。続けての刊行、小田勝『実例詳解 古典文法総覧（和泉書店・二〇一五年）』においても、同じく、〈「を」に通う「の」〉（三七四ページ）として触れている。

② 今泉忠義『源氏物語語法篇』（桜楓社・昭和五十二年）は、全五巻として出版される予定であったが、昭和五十一年十一月ご急逝により、第一巻から第三巻の半ばまでに相当する部分をオフセット印刷したものである。

③ 文学博士今泉忠義・北海道教育大助教授鎌田広夫『国語学演習用源氏物語桐壺（附源氏物語ところどころ）』（白帝社・昭和三十三年／昭和四十四年九版）。昭和四十六年度、筆者自身も、この教材で、國學院大學の国語学演習Ⅰという科目を担当させていただいた。

④ 今泉忠義訳『源氏物語一』（桜楓社・昭和四十九年）。その後、『源氏物語現代語訳篇』として、五十四帖の現代語訳が十巻となった。さらに、今泉忠義・森昇一・岡崎正継『源氏物語本文篇』三巻と併せて、今泉源氏十三巻といわれた。なお、現在、その現代語訳篇は、講談社学術文庫に収められて、広く読まれている。

⑤ 吉沢義則『対校源氏物語新釈』（平凡社・昭和二十七年）。

⑥ 池田亀鑑『源氏物語大成巻三校異篇』（中央公論社・昭和二十九年）。

⑦ この場合、その「〈連体修飾語＋さま・心地・けはひ〉などの述語が自動詞「す」で、〈感じられる〉意であるところからは、それら「連体修飾語＋さま・心地・けはひ」などは、主語というよりも、時枝誠記『国語学原論』（岩波書店・昭和十六年）にいう対象語ということになろうか。

⑧ 時枝誠記『国語学原論』（既出）は、辞としては表現されない陳述機能を零記号を用いて、そこに潜む機能を示したが、ここでは、主格の機能が認められても、そこに主格助詞が表出されていないことを述べるのに、譬えとして引かせていただいただけのことである。

⑨ さきに、時枝誠記『国語学原論』（既出）を引いて対象語といったところを、格関係として捉えて説明してみた。「〈連体修飾語＋さま〉〔ガ〕〈感じられる〉」の〔ガ〕について説明しようとしたものである。

⑩ 中古に登場した名詞「心地」が、動詞「す」と深く関わって一定の表現形式を構成し、しかも、その表現を大量に使用している実態に驚かされる。さきごろ発表させていただいた「例示の副助詞「など」によって起用された補助動詞「す」について（「國學院雑誌」第一一六巻第十二号・平成二十七年十二月）執筆の折にも、実は、その「など」が中古に登場した助詞であるのに、これと深く関わって、一定の表現を構成し、しかも、その表現を大量に使用していたことに気づかされた。動詞「す」には、登場間もない単語も容易に結びつくことのできる柔軟性が潜在しているのであろうか。

⑪ 吉沢義則『源語釈泉』（増補再刊＝臨川書店・昭和四十八年（昭和二十五年初版））。

⑫ 北山谿太『源氏物語のことばと語法』（武蔵野書院・昭和三十一年）。

⑬ 小稿に関する部分に限って、以下に引いておくこととする。

○直感的にとらえられる人や物の様子をいうのが原義。「けしき」が事物の外形を視覚によってとらえたものであるのに対して、「けはひ」は、ぼくぜんとした全体的な感じをいい、主として聴覚によってとらえられた事物の様子を指す。この違いは用法の上にも現れており、「けしき」には「見る」「見す」というが、「けはひ」は「聞く」という。また、「けはひ」は自ら発動するものとして「けはひす」というが、「けしき」は「けしきあり」となる。

⑭ 山田孝雄『日本文法論』（宝文館・明治四十一年）。第一部第四章「語の運用」第二「語の転用」の三「用言に関する転換」の一「あり」と

「す」との交渉」（七八八ページ）。

【補記】

小稿が、その論題に「連体修飾語を必須とする」を冠した事情については、やはり触れておかなければならなかった。そのとおりの事実であるのだが、筆者には、そう気づかされた瞬間があったのである。山田孝雄『日本文法論』（前出）の第一部第三章「語の性質」第二「用語」の四「形式用語」において、その形式用語「す」の賓語について述べられているなかで、その用例として「心地す。」を挙げていた（三一七ページ）からである。その瞬間、連体修飾語を冠していない「心地す。」は存在しない、と思ったからである。